

シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第41回

中部森林管理局総務課

井上 日呂登

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

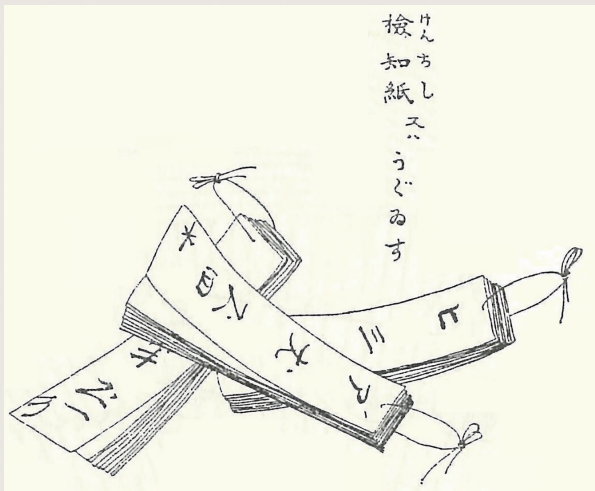
「裏木曾」その五 造材と検尺

伐採された木を丸太に加工するのが「造材」ですが、斧で伐採していた頃の木曾・裏木曾では木の皮を剥き丸太の両端を斧で削り丸め



昭和20年代頃、現在の東濃森林管理署付知裏木曾国有林での造材の様子

ることがしばしば行われました。この「すりこぎ」状に丸められた部分を「頭巾」と呼びます。これは斜面をおろす・川に流すなどの運材の際の木材の割れを軽減するためであったとされます。ただし、それだけ木材として使える部分が減る訳ですから、後の時代には行われなくなりました。皮も時代や樹種によって剥かない場合があります。



検知を記録する紙は
うぐいす・ウグイス帳などとも呼ばれた
(大正5年帝室林野管理局発行
「木曾御料林之造材運材」より)

造材された丸太はその本数、樹種、寸法等を確認・記録するため検尺(検知)を受けるこ



切判を掘るノミの時代による変遷
(「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より)

とになります。検尺は代人(旦那)と呼ばれるまとめ役・指導員を中心に行います。伐木造材した出来高で賃金が左右された時代でしたので検尺は厳格さを要求されるものでした。検尺の際には代人と「驚採り」とも呼ばれる記帳役、実際にその山で作業した柚(伐採夫)数人が立会います。代人が丸太を一本ごとに調べるたびに大きな声で呼び上げ、これを記帳役が復唱し「うぐいす」とも呼ばれた検知紙に記帳します。この大きな声で呼び上げ、復唱する声は山々にこだまする検尺の風景から「うぐいす」という言葉が出てきたとも言われています。

大正時代初期頃の裏木曾での検尺のイメージ
〔付知川に於ける材木伐出の沿革と繪解〕より



また検尺の際には「切判きりはん」と呼ばれる記号がノミで刻まれ、墨を入れられます。これはバラバラに川に流されるなどした後でも、いつでもどこから出材された丸太であるのか判別できるようにするためのものです。切判で刻まれるのは伐採した事業所、伐採年度、樹種、杣看板（どの杣の組が伐採したのかの印）といっ

た情報になります。例えば「クナ」は宮内省帝室林野管理局の付知（中津川）出張所の木材であること、「ヒ」はヒノキ、「二」は大正二年の伐採であることを示しています。切判は江戸時代からある慣習でしたが、時代が経つに連れてインクを付けたハンマーで刻印を打つなどの作業に変わっていきます。

現代でも神宮（伊勢）の式年遷宮関連行事などにおいて、切判の流れをくむ印が御神木に刻まれることがあります。



昭和20年代頃、現在の東濃森林管理署付知裏木曾国有林にて切判を刻む風景

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むかししの写真を紹介するサイトです。
当サイトへは、コードを読み込んでください。

